

## (鳥)

野潟の埃土(すくい)」「一日の作業量は湯土十三艘、下二艘。これが一日のノルマであった。一年間のうち七、八、九月は毎日ショレンかきに明け暮れたものだった。多い農家で三百艘。少ない人でも百艘も積み上げたものである。……一センチでも三センチでも田の面を上げるために、そして心の底から今年こそ豊作になつて欲しいと祈つた。」



かつては水路だったという路地(東本町)  
写真手前の戸に当時の名残がみられる。

地図 [8]

学したものです。その頃は昼食の弁当を持っていなければ子供も大勢いて、腹の空くのを我慢して授業を受けていました。」

## (明)

治時代には、収穫が終わるのは十二月末。雪が降るのに裸足でハサ稻を担いで入れたこともあったと昔の人は話していました。庭があかなければハサ入れができぬ。ハサがあかなければ稻刈りができるまで、ハサ稻が庭に入れば、毎朝三時に起きて夜が明けるまで仕事した。」

「植え(さつき)は一番日の長い時で、未明から日暮れまで十四、五時間もの長時間水田に浸り、腰を曲げての重労働であつたが、また暇やかな楽しい仕事をもあつた。大事でもあつた。大作の小さい家はお互いに結をして五、六人から十二、三人で行なつた。」



現在の弁天橋より新潟市内をのぞむ。  
弁天橋地蔵が広がっている。(昭和38年)

地図 [3]



栗ノ木川舟運の船着場(昭和初期)

地図 [5]

現在の鳥潟新田。  
ここもかつてはハサ木と水路の風景が広がっていたのであろう。

ハサ上げの風景



鳥潟バイパス(国道7号線)兼竹付近。  
本道はかつての栗ノ木川。一段高い国道は堤防だった。

地図 [2]



現在の清五郎排水路  
かつての清五郎川(昭和31年)

地図 [4]

**梅** 雨時には三日間も雨が続くと、上流から出水は堀からあふれそうになり、集落民総出でショレンを持ち堀の泥をさらい、あるいは縮株を抜き取り、溝畔(水路の土手)上に土壠がわりに積み上げ潜水を防御したものである。水は余っても足りなくとも、上流一下流間の争いはしばしば起つた。

**小** 作人は地主から田んぼを借りて、二町五反くらいは耕作していましたが、米はほとんど地主に納めて、手元に残る米は少なかつたです。毎年のように肥料商や米屋から生活費や肥料代を、その秋に取れる米を抵当に借金をしていました。残り少ないので、米は借金の返済に当てなければならず、秋に米が取れても手元には何も残らず、また借金をしかければならない。毎年、その繰り返しだした。

作人は地主から田んぼを借りて、二町五反くらいは耕作していましたが、米はほとんど地主に納めて、手元に残る米は少なかつたです。毎年のように肥料商や米屋から生活費や肥料代を、その秋に取れる米を抵当に借金をしていました。残り少ないので、米は借金の返済に当てなければならず、秋に米が取れても手元には何も残らず、また借金をしかければならない。毎年、その繰り返しだした。

**人** 薙尿を施した田の泥水が頬や首に跳ねて体中が臭くなつたのだったが、それが当時は当たり前のことであった。桶の施肥時には、肥料桶の縄を肩にかけて桶を前に抱き、カラスガイのひしゃくで株あて人糞をかけながら田を踏き歩いた。

や昔物に跳ねて体中が臭くなつたのだったが、それが当時は当たり前のことであった。桶の施肥時には、肥料桶の縄を肩にかけて桶を前に抱き、カラスガイのひしゃくで株あて人糞をかけながら田を踏き歩いた。

地図 [6]

現在の鳥潟新田。  
ここもかつてはハサ木と水路の風景が広がっていたのであろう。

ハサ上げの風景

